

《論説》

「支配的政党」としてのゴースト政党の後退 (一)

——選挙政治史の観点から——

森 本 哲 郎

はじめに

戦後フランスの政党史を見ると、選挙政治史という観点からのものに限定して考えても、政党の数の多さ、離合集散のはなはだしさ（とくに右派、中道でそうである）、またそれとも関連して名称の変化もしばしばであること等のゆえに、一見して理解しやすいというものではない。しかし、日本の戦後政党史を考えるに当たって、戦後フランス政党史は比較政治学的にみて、様々の示唆的な事例を提供してくれている。

直ちに思い浮かぶことだけを（選挙政治史のレベルに限定して）あげてみても（表を参照）、たとえば、①第五共和制における「支配的政党」としてのゴースト政党の成立とその後の退潮、②左派政治勢力において戦後一貫して優勢であった共産党、そして近年におけるその急速な低落、③逆に、戦後一貫して低落の途にあった社会党の七〇年代以降の復活と政権の獲得、ということがある。

【戦後の議会選挙（得票率の推移）】  
 （本国のみ。1958～81年は第一回投票の結果。）

	(%)	'45	'46 6月	'46 11月	'51	'56	'58	'62	'67	'68	'73	'78	'81	'86	
左派	極左								2	2	4	3	3	1	2
	共産党	26	26	29	27	26	19	22	23	20	21	21	16	10	
	社会党	24	21	18	15	15	15	13	19* 17* 13 10 16	19**25**38**32					
	中道諸派	36	40	39	23	26	19	17			22	19			
右派	独立共和派 (RI)							4	6		10	42****			
	ゴースト				2	22	4	21	32	32					
	RI 以外の 保守派	13	13	13	14	15	22	10	4	4	3	3	3	3	
	極右						12	1						10	
		エコロジスト											2	1	1

\*社会党だけの分は、'67年：16%，'68年：13% (Byron Ciddle, "The French Parti Socialiste", in Paterson/Thomas (eds.), *Social Democratic Parties in Western Europe*, Croom Helm, 1977, p. 58)

\*\*MRG (左翼急進運動) の数字を含む (2～3%程度)。

\*\*\*このうちゴーストの分は、37% (J. R. Frears, *Political Parties and Elections in the Fifth French Republic*, Hurst, 1978, p. 217.)

\*\*\*\*このうちゴーストの分は、22% (推定。1986年のゴースト得票率は、比例代表制ゆえ、獲得議席数の比率から仮に計算してみたもの。この選挙では、UDF と RPR は多くの選挙区で共同名簿を作成していた。)

【出典】 本文注(2)を参照。

これらはいずれも戦後日本の政党史における、たとえば、①自民党単独政権の長期持続、②共産党の一定程度の勢力獲得とその後の停滞、③五〇年代後半～六〇年代前半にピークを迎えた社会党のその後の長期低落、を分析するに当たって比較の対象にしてみたい誘惑にかられる事例を提供しているだろう (もちろん、日本の政党研究に当たって比較政治学的に意味のある事例を提供するものは、戦後フランス政党史だけでないのは当然である)。

本稿は、もともと「選挙政治史におけるフランス社会党の衰退と再生」の分析をめざして準備されたものであるが、とりあえず、その「環境的条件」の検討から入ることにし、まずゴーストの後退の要因を大まかに、また仮

説的であつても把握してみようとしたものである。けだし、社会党の再生はR・W・ジョンソンも指摘するように、<sup>(1)</sup>ゴーストの衰退によつてはじめて可能になったという側面があるからである。

(1) R. W. Johnson, *The Long March of the French Left*, Macmillan, 1981, p. 71. なおジョンソンの議論の検討は、後のほうで行われる。

(2) 「表の出典」拙稿「フランスの政党政治（一九五八—一九八七）」、川端・的場編『現代政治』法律文化社、一九八八年、所収、一七二頁の表を簡略化して掲載。

## 第一節 ゴースト政党の支持基盤の変容

ここでいう「支配的政党」<sup>(1)</sup>の地位にある政党は、一般的に、多様な社会階層を横断的に支持基盤として結集し得た、いわゆる「包括政党」<sup>(2)</sup>となつていると想定できる。そこで、まずこの点をゴースト政党について検討してみよう。

各社会階層（ここでは社会・職業カテゴリー）における諸政党への支持率を調べた世論調査によれば、ゴースト政党が「支配的」であつた一九六七年・一九六八年とその後退期にあたる一九七三年・一九七八年の結果を比較して、もっとも注目すべき相違点は産業労働者（*ouvriers*）におけるゴースト政党支持率の低下である（表一一）。それはまたゴースト政党の有権者構成の変化にも現れている（表一一）。そして就業人口全体における産業労働者の比率は停滞（あるいは微減）の傾向にあるとは言え、依然最も大きなカテゴリーであることを考えると（表一一三）、産業労働者階層における支持率の著しい低下が、ゴーストの退潮の決定的な要因ではないかと推定される。（これとは対照的に、産業労働者の間での左翼政党支持率の顕著な増加、とりわけ社会党の増加の度合いが目立っている。）ではこの変化をどう説明するのか。それがここでの課題である。

表 1-1 社会階層別の各政党支持度

(注) 国民議会選挙での投票意向調査。分類は、世帯主の職業による。

## ①社会党

職 業	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者の	14%	20	19	29	11.5
商工業者の	12	13	22	25	NA
上級幹部・自由業の		9	20	24	24.5
中級管理・事務の	22	15	29	33	41.5
労働者の	18	18	27	31	37.5
無職の	14	19	20	28	26
全体の	17	17	23	29	NA
	FGDS	FGDS	UGSD	PS-MRG	PS-MRG

(出典) *Sondages* 1967 n°3 p. 55, 1968 n°2 p. 100, 102, 1973 n°1 p. 21, 1978 n°1 p. 22, 27, V. Wright 1984 p. 77 (1981の分) により作成。

\* 出典の正式タイトル等は、本文(注)(7)を参照のこと。(以下同じ)

## ②共産党

職 業	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者の	13%	12	8	6	7.5
商工業者の	12	10	12	8	NA
上級幹部・自由業の		10	11	9	6
中級管理・事務の	18	21	17	18	13.5
労働者の	31	33	33	36	28
無職の	20	21	17	16	8.5
全体の	21	22	19	20	NA

(出典) ①と同じ。

まず考えられるのは次のような解釈である。「一九六〇年代にはゴリストがドゴール將軍(一九六九年政界を引退、一九七〇年死亡)を戴くことで利用し得た、將軍の「党派を越えた国民的リーダー」としてのイメージがもつ「個人的なアピールの力」(カリスマとまでは言えないとしても)が一九七〇年代には利用し得なくなった。」

この解釈は、大統領選挙での各社会階層における支持分布を見ると、ある程度正当化されると考えられる(表一四)。この表から

## ③ ゴースト

職 業	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者の	45%	48	49	31	45
商工業者の		53	36	26	NA
上級幹部・自由業の	44	48	39	28	32
中級管理・事務の	35	40	23	19	17.5
労働者の	30	31	22	13.5	13.5
無職の	43	42	44	26	20
全体の	38	41	36	21.5	NA
	UDV* <sup>R</sup>	UDR+RI	Majorité	RPR	RPR

(出典) ①と同じ。

## ④ ゴースト以外の右派・中道政党

職 業	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者の	19%	12	16	28	35
商工業者の		15	22	29	NA
上級管理・自由業の	18	23	20	25	29.5
中級管理・事務の	15	12	19	17	21.5
労働者の	11	8	12	10	18.5
無職の	12	11	14	22.5	43
全体の	14	11	15	19	NA
	CD	PDM	Réfor.	UDF	UDF

(出典) ①と同じ。

は、ゴーストのその後の大統領候補であるポンピドー（二九％）、シャバン・デルマス（二三％）、シラク（二〇％）（保守派内のライバル、ジスカールデスタンは、一七％と一八％）と比べてとき、ドゴールへの労働者階層の支持率の高さが顕著なこと（四二・五％）が読み取れるであろう。このことから、ドゴールが発揮し得た特殊な選挙での力のいわば「反射的利益」として、一九六〇年代のゴースト政党は、労働者階層からある程度大きな支持を獲得しえたのではないかと考えられる。（もつとも二つの表を比べれば明らかのように、この時でさえ党はドゴール個人が集めえた支持をすべて享受できたわけではなかった。）

表 1-2 各政党の投票者構成の変化

## ①社会党

職 業	'52	'56	'58	'65	'67	'68	'73	'78
農業従事者	14%	8	8	15	14	18	11	8
商工業者	10	7	5	6	9	9	5	5
上級幹部・自由業		3	4	4	5	3	5	8
中級管理・事務	19	23	28	19	18	16	22	24
労働者	21	39	31	33	33	34	36	31
無職	36	20	24	23	21	20	21	24
	SFIO	SFIO	SFIO	SFIO	FGDS	FGDS	UGSD	PS-MRG

(注) 世帯主の職業による(1952年は回答者本人の職業)。投票意向または投票後調査。

(出典) *Sondages* 1952 n°3 pp. 10-13, 24-25, 40-41, 49-50, 66, 1960 n°4. pp. 18-19, 1966 n°2 p. 13, 1967 n°3 p. 52, 1968 n°2 p. 101, 1973 n°1 pp. 16-19, 1978 n°1 p. 24, 26 により作成。

## ②共産党

職 業	'52	'56	'58	'65	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者	13%	5	6	8	9	8	5	2	2
商工業者		7	6	5	6	5	5	3	4
上級幹部・自由業	9	3	8	2	2	2	3	4	5
中級管理・事務	13	17	21	17	15	18	17	18	22
労働者	38	49	40	51	49	49	51	52	40
無職	27	19	19	17	19	18	19	20	27

(出典) ①と同じ(但し, 1981年は, Platone et Ranger 1986 p. 76 による)

## ③ゴースト

職 業	'52	'56	'58	'65	'67	'68	'73	'78	'81
農業従事者	19%-	7	13	16		18	17	11	13
商工業者		-	18	11	11	14	9	8	10
上級幹部・自由業	17	-	9	5	5	6	7	13	21
中級管理・事務	13	-	19	20	16	18	19	19	19
労働者	15	-	26	27	28	25	21	19	19
無職	36	-	21	24	24	19	27	30	18
	RPF	-	UNR	UNR	UDV*R	UDR+RI	Maj.	RPR	*

(\*) 1981年は, 大統領選挙第一回投票後調査での, Chirac (ゴースト) への投票者。

(出典) ①と同じ(但し, 1981年は, Jaffré 1982 p. 17 による)

## ④ゴーストを除く右派政党

職 業	'52	'56	'58	'65		'78	
農業従事者	33%	22	24	20	17	10	12
商工業者		18	15	13	9	9	10
上級幹部・自由業	NA	13	15	8	7	12	13
中級管理・事務	11	11	19	15	17	22	20
労働者	9	16	22	20	31	17	16
無職	NA	20	15	24	19	30	30
	← Modérés →		CNIP		RI	PR	UDF 全体

(出典) ①と同じ。

## ⑤中道派政党

職業	'52	'56	'58	'65	'67	'68	'73	'78	
農業従事者	20%	7	8	22	25	17	25	16	14
商工業者		10	13	6	9	14	11	15	13
上級幹部・自由業	NA	6	8	4	4	4	5	10	11
中級管理・事務	19	20	23	30	14	18	16	19	22
労働者	19	31	28	25	25	25	25	22	21
無職	NA	26	20	21	23	22	18	18	17
	MRP	MRP	Rad.*	MRP	MRP	Rad.	CD	PDM	Réfor.
									Rad.

(注) Rad\*=非マンドス派の Radicaux のみ

(出典) ①と同じ。

表 1-3 就業人口構成の変化

CSP (大分類)	1954	1962	1968	1975
農業従事者	26.7%	20.3	15.0	9.3
商工業者・職人	12.0	10.6	9.5	7.8
自由業・上級幹部職員	2.9	3.9	4.8	6.7
中級管理職・事務販売職	16.5	20.3	24.5	30.4
労働者	33.8	36.6	37.8	37.7
その他	8.0	8.3	8.4	8.1
総 数 (万人)	1919	1925	2040	2178

(注) CSP=社会-職業別カテゴリー

(出典) 壽里 p. 14 より作成。

表 1-4 社会階層別の大統領候補支持率

(注) 選挙直前の投票意向調査（'81年は投票後調査）。世帯主の職業による（'81年は回答者本人の職業）。

## ①社会党候補

職 業	'65		'69 (1) ドフェール	'74		'81	
	(1) ミッテ ラン	(2) ミッテ ラン		(1) ミッテ ラン	(2) ミッテ ラン	(1) ミッテ ラン	(2) ミッテ ラン
農業従事者の	22%	41	6	33	40	23	32
商工業者の	14	33	9	26	33	14	36
上級幹部・自由業の	23	37		24	26	19	45
中級管理・事務の	31.5	45	10	41	50	29	62
労働者の	34	55	11	63	73	33	72
無職の	24.5	40	7	36	43	25	45
全体の	27	45	9	43	50	26	52

(注) (1): 第一回投票, (2): 第二回投票。

(出典) *Sondages* 1965 n°4 p. 14, 25, 36, 1969 n°3 p. 58, 72, 1974 n°1-2 p. 50, 54, V. Wright 1984 p. 76, J. Jaffré 1982 p. 20 ('81年の分) により作成。

## ②共産党候補

職 業	'69 (1) デュクロ	'81 (1) マルシェ
農業従事者の	8%	2
商工業者の		9
上級幹部・自由業の	7	7
中級管理・事務の	17	18
労働者の	29	30
無職の	19	12
全体の	18	16

(出典) ①と同じ。



## ③ ゴースト候補

職 業	'65		'69		'74	'81
	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(1)
	ドゴール	ドゴール	ボンピ ドー	ボンピ ドー	シャバン デルマス	シラク
農業従事者の	38%	59	50	61	25	36
商工業者の	44	67	46	59	17	29
上級幹部・自由業の	32	63			15	36
中級管理・事務の	38.5	55	38	57	15	18
労働者の	42.5	45	29	50	13	10
無職の	52	60	47	66	23	16
全体の	43	55	41	58	17	18
第二回投票での相手	ミッテラン		ポエル			

(出典) ①と同じ。

## ④ ゴースト以外の右派・中道候補

職 業	'65	'69		'74		'81	
	(1)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)
	ルカニ ユエ	ポエル	ポエル	ジスカー ール -デスタン	ジスカー ール -デスタン	ジスカー ール -デスタン	ジスカー ール -デスタン
農業従事者の	28%	32	39	36	60	33	68
商工業者の	24			35	67	35	64
上級幹部・ 自由業の	26.5	31	41	50	74	24	55
中級管理・ 事務の	21	25	43	35	50	17	38
労働者の	16	20	50	17	27	18	28
無職の	14	22	34	33	57	35	55
全体の	20	25	42	30	50	28	48
第二回投票で の相手		ボンピ ドー		ミッテラン		ミッテラン	

(出典) ①と同じ。

しかしドゴールの力とて真空の中でも發揮し得た訳ではなからう。シャルロ (Charlot) の研究が明らかにしているように、第四共和制下ではドゴール將軍の人氣は高いものではなく、たとえばドゴール政權を望む有権者の比率は、一九五五年一二月でわずか一%、五六年四月で五%にすぎず、この数字は五七年九月(一一%)、五八年一月(一三%)—しかしこれは現職首相支持率と同じ)と上昇を示すが、この上昇は「明らかに「ドゴールの」カリスマのお陰というよりも、第四共和制の機能不全と失敗によって」であつた。<sup>(3)</sup>

またおなじくシャルロが明らかにしているように第五共和制下でのドゴール將軍の人氣も政治的局面に應じてかなりの變動を示している。「一九五八年から六二年までのゴリスムの「アルジェリア時代」、この時期にはドゴール將軍は国民的結合のリーダーであり、一〇人中六ないし七人の国民に支持され反対するものは二人にすぎなかった。これにつづく彼の追放までの時期には、ドゴール將軍が次第に多数派 (majorité) の指導者として登場して来る。支持者はその一〇%を失い、一方反対者は一〇%を獲得する」<sup>(4)</sup>。

結局ドゴール個人の選挙上の力がとくに効果的であり、その反射的利益を受ける形のゴリスト政党への労働者階層の支持を有意な程に大きくあらしめた《環境》の存在が指摘されねばならない。

では、ドゴール個人およびゴリスト政党に労働者階層の大きな支持を与えていた《環境》とはどのようなものであろうか？

この点を考えるにあたって「ゴリスムの選挙での強さあるいは政治的な強さ」を「ドゴールおよびゴリストの政策上の業績(あるいはその可能性)に対する有権者の評価の結果として、安定した支持の調達がなされたからだ」と説明したシャルロの論証が手掛かりを与えてくれる。ここでは、(1)大統領としてのドゴールがおこなった政策に対する世論の評価についての世論調査(一九六二—六七年)を整理してシャルロが与えた解説(表一—五も見よ)、

表 1-5 世論によるドゴール將軍による執政の  
バランスシート (I. F. O. P)

	消極的解答			積極的解答		
	(1) 1962	(2) 1965	(3) 1967	(1) 1962	(2) 1965	(3) 1967
I 1. 再建と秩序……………	—	—	—	11}	9}	5}
2. 個人的権力と安定……………	9	4	4	11}	27}	10}
3. 経済財政政策……………	3	21	10	8	8	6
4. 社会政策……………	19	18	28	—	4	4
内政の総計……………	31	43	42	30	48	25
II 1. アルジェリア、植民地の放棄、 アルジェリアの和平、非植民 地化……………	6	8	5	41	15	13
2. 発展途上国への援助……………	—	—		—	—	—
3. O. A. S. と闘わなかったこ と……………	12	—	—	—	—	—
海外領土政策の総計……………	18	8	5	41	15	13
III 1. 平和……………	—	—	—	—	—	11
2. フランスの栄光、威信の増大 ……………	—	—	—	7	13	20
3. ヨーロッパ政策……………	3	4	2	6		
4. その他の対外政策……………	—	6	11	—		
5. 核兵器、軍備……………	—	4	1	—	1	—
対外政策の総計……………	3	14	14	13	14	31

注：解答の類別は著者「シャルロ」が行なった。質問の型は次のようなものである。「1958  
年以来ドゴール將軍が大統領となっていますが、あなたの考えでは、次の～年において  
彼が成功した事、あるいは失敗した事は何ですか？」

(出典) Charlot 訳書 (1976) p. 55 表 6 を転載。

および(2)各党派の能力・適性  
にたいする世論の期待度調査  
(一九六七年の世論調査)に  
ついてのシャルロの解説を取  
り上げてみよう(表一六も  
見よ)。

まず(1)について。「まず内  
政における消極面〔世論によ  
る否定的評価〕の優位——こ  
れは秩序と安定によってもた  
らされた満足感が、もはや経  
済的・財政的・社会的政策へ  
の不満を帳消しに出来なくな  
るに従い増大する傾向にある。  
次に外交における積極面〔世  
論による肯定的評価〕の優位  
——しかしこれは、非植民地  
化とくにアルジェリアのそれ

表 1-6 世論による適性領域の認知の分布① (1967年1-2月)

	政 策 領 域 (%)	ゴースト	中 道	左 翼
1	世界におけるフランスの威信	51	14	4
2	国際的緊張緩和への貢献	33	10	16
3	ヨーロッパ統合への貢献	32	12	20
4	フランスの繁栄の確保	31	11	19
5	フランスの政治的安定	40	7	13
6	民主的制度の維持	24	11	20
7	自分の地方の発展	24	7	30
8	住宅問題の解決	22	7	29
9	失業との闘い	19	6	40
10	富の公正な再分配	17	8	26

(出典) Charlot 訳書 p. 56 より作成。

表 1-6 世論による適性領域の認知の分布② (1967年12月, 1970年8月)

「あなたの考えでは、次の問題を最も首尾よく解決できる政府多数派 (Majorité) は何ですか」 (各欄の左が '67年, 右が '70年の数字)

政 策 領 域 (%)	現在の Majorité	非共産左翼 + 中道	非共産左翼 + 共産党
フランスの経済拡張	33 34	17 22	13 9
フランス工業の国際競争への適応	33 31	13 18	10 7
農業の近代化と適応化	26 26	17 21	12 10
企業利益への労働者の参加	25 24	12 20	20 17
完全雇用の問題	21 23	18 23	19 13

(出典) Sondages 1971 n°1-2 pp. 63-64.

のためになされた労苦が、時間的に遠ざかるにつれて減退しつつある。そして最後に、「留保された領域」である対外政策に対する支持の優位である。<sup>(5)</sup>

つぎに(2)について。

(以下、筆者による要約)

(a) 世論においてゴースムの適性領域と認知されているのは、①…対外政策(表一六の番号…一、二、三)、②…政治制度(同…五、六)、③…繁栄と経済成長(同…四)の三領域であり、これに対して(b)左翼の適性領

域と認知されているのは、④…強者からの弱者の防衛(同…七、八、九)と⑤…効率に対する同情と正義(同…一〇)の二領域である(以上表一—六を見よ)。更にこれをそれぞれの党派の支持者別に見ると、(c)ゴースト支持者で次のものをゴースムの適性領域と認知しているのは、①…対外政策(表一—六の番号二二)六四%、②…政治制度(同…五、七三%)、③…繁栄と経済成長(同…四)六七%、これに対して、⑤…効率に対する同情と正義(同…一〇)は四一%である。また、(d)左翼支持者でこれらを左翼の適性領域と認知しているのは、それぞれ順に、四五%、四〇%、五五%、六三%であった。

以上のシャルロの解説から一九六〇年代を通じてゴーストは、政治制度、対外政策、経済成長の領域での業績(あるいはその可能性)が評価されたと結論付けことが出来る。

さて、ここで参照したシャルロの著作(*Le phénomène gauliste*)は、全体的に、ゴーストの将来に対するオプティミズムに支配されており、この著作の刊行(一九七〇年)後のゴーストの凋落によって、ミソを付けた感があるとは言え、この凋落の原因を考えるに当たって手掛かりとなる重要な示唆を右に引用した論証を踏まえて与えている(示唆に止どまっているのは残念だが)。

「選挙を重ねていくたびに、ゴースムは、フランス人の繁栄の上に——あるいはむしろフランス人が繁栄について思い描く観念の上にその権力の基礎を置くようになる。対外政策に関する問題は、世界の平和を危険にさらすような例外的危機を除けば、選挙における態度決定において少ししか意味をもたない。政治的・制度的安定も確かに重要だが、常に多数派をもたらすという確証はない。殊に野党が、自分を不利にするこれらの領域で、ゴースムを攻撃するのを止めたり、あるいは野党自身がより統一したイメージを持つようになったり、あるいは「信頼するに足る」代わりの解決策を自ら提案出来るようになれば、なおさらそうである」<sup>(6)</sup>

以上を踏まえて、ドゴール及びゴリスストに大きな支持をもたらしていた《環境》に関する筆者の仮説を整理すれば次のようになる。

(1) 一九六〇年代には、国民が関心を持っている政策領域は、政治制度と対外政策そして経済成長であった。他方これらは、ドゴールとゴリスストに「実績と能力あり」と認められている領域であった。

(2) ところが一九七〇年代になると、世論がドゴールとゴリスストには余り適性を認めず、逆に左翼のほうに認めている領域、すなわち「社会的公正」の領域（先のシャルロの解説で言うところの、「強者からの弱者の防衛」「効率に對する同情と正義」がこれに含まれる）が国民の主要な関心領域になってきた。

そこで次にこの点を、いくつかの世論調査の結果を手掛かりに検討してみたい。

(1) 少し抽象的な議論になるが、「支配的政党」(dominant party, parti dominant)の定義として次のように考えておきたい。「多党システムにおいて、その得票数が他の諸政党を大きく越えており、またそれらの細分化のおかげであらゆる政府形成の基軸的要素としてその存在を際立たせている政党。」(B. Badie/J. Gerstlé, *Lexique: Sociologie politique*, PUF, 1979, p. 84) これは、フランスにおけるゴリススト研究の第一人者J・シャルロ(Charlot, Jean)の同名論文(“Du parti dominant”, *Projet* 48, sept.-oct. 1970)での説明を手際良く整理したものである。ここではこれだけで充分なのだが、理解をより確かなものにするために、シャルロの論文からいくつかの補足をしておこう(J. Charlot éd. *Les partis politiques*, A. Colin, 1971, p. 239 註に再録されたものによる)。

① まず、「支配的(一党優位と言っても良い)」(dominant)であるということは、その政党の絶対的な大きさではなく、「政治市場」における他政党との比較による相対的な大きさの問題である。ただし経験的に見て、三〇〜三五%以下の得票率(対投票数)では「支配的政党」となるチャンスはないと見なければならぬ。

② 次に、その政権の独占を他の政治集団の弾圧・禁止に依拠している「唯一政党」(parti unique)とは全く別物であることは言うまでもない。

③ さらに、混同しやすいが「多数政党あるいは多数適性政党」(parti majoritaire ou parti à vocation majoritaire)とも区別されねばならない。これは、その選挙レ

ベルあるいは議会レベルでの勢力が、単独で政府与党を形成するあるいは形成することを期待できるほど十分に大きな政党を指す概念である。従って「支配的政党」はすべて、少なくとも「多数適性政党」だが、逆は必ずしも言えない。たとえば二大政党システムの構成政党も、また「多数適性政党」だからである。④さいごにシャルロは、「支配的政党」という概念を最初にまとめた形で提起したデュヴェルジエ(Duverger, Maurice, *Les partis politiques*)の定義を退ける。デュヴェルジエの言う「支配的政党」(parti dominant)とは「1 他の政党よりも大きく、それらの上に立ち、一時期のあいだ、それらとは明確な距離がある[こと] 2 その政党がひとつの時代と一体化する、すなわち、その教義、理念、方法、スタイルが、何らかのかたちで時代のそれと合致している[こと] 3 その支配の『正当性』にたいする承認。『すなわち』 “一党優位政党”の敵や、それに一票を投じることを拒否する市民たちでさえも、その政党の地位が自分達よりも上にあることを認め、その影響力を認めている[こと]」の三つの特徴によって定義される(以上、村上信一郎氏の手際よい整理による。同「一党優位政党システム」西川知一編『比較政治の分析枠組』ミネルヴァ書房、一九八六年、一九九—二〇〇頁)。シャルロは(三)のうち第二の特徴だけを取り上げるのだが、この定義では「操作が困難で、そのうえ多党システムにおける“ちょういがい政党”(parti-charnière) “二大政党システムにおいて政権の座に長く止どまっている“多数政党”、分裂している野党によりそのヘゲモニーが問題にされることのない真の“支配的政党”を同一レベルにおいてしまう」(op. cit.)と批判する。実のところを言えば、デュヴェルジエの定義の方が内容豊富で興味深く感じられるのだが(とりわけ第二の特徴)、ここでは定義の操作性(残念ながらもつとも興味深い第二の特徴が、この点でもっとも問題が多い)を重視してシャルロの定義に従っておきたい。なおデュヴェルジエの「支配的政党」概念の下敷きに第三共和制下(とくに第一次大戦前)の急進党があり、シャルロのそれに第五共和制下のゴースト政党があるのは容易に理解されることである。

## (2)

ここで「いわゆる」としたのは、しばしばこのような意味で用いられる「包括政党」という概念は、この言葉の出典をなしているO・キルヒハイマー(Kirchheimer)の《catch-all party》概念の一部をなしているにすぎないからである。この点でひくくは次を参照せよ。Karl Dietrich, *Testing the Catch-all Thesis: Some Difficulties and Possibilities*, in H. Daalder/P. Mair (eds) *Western European Party Systems: Continuity and Change*, Sage, 1983, Steven B. Wolinetz, *The Transformation of Western European Party Systems Revisited*, *West European Po-*

*itics* v. 2 n°1 1979. また次も参照されたい。氏家伸一「包括政党」西川編『前掲書』所収。

(3) Jean Charlot, *Le phénomène gaulliste*, Fayard, 1970; 野地孝一訳『保守支配の構造』みすず書房、一九七六年、四三頁。

(4) 同前、四七頁。

(5) 同前、五四頁。

(6) 同前、六三—六四頁。

(7) 〔表一—一—一六〇出典〕① *Sondages; Revue française de l'opinion publique*. ② Vincent Wright, "Introduction: The Change in France", in ditto (ed.) *Continuity and Change in France*, G. Allen & Unwin, 1984.

③ François Platone et Jean Ranger, "L'échec électoral du Parti communiste", dans Alain Lancelot (éd.) 1981: *les élections de l'alternance*, Presses de la F.N.S.P., 1986. ④ Jérôme Jaffré, "De Valéry Giscard d'Estaing à François Mitterrand: France de gauche, vote à gauche", *Pouvoirs* 20 (1981: la gauche au pouvoir), 1982.

⑤ 壽里茂『現代フランスの社会構造—社会学的視座—』東大出版会、一九八四年。